川崎市環境技術産学公民連携公募型共同研究事業

環境情報・写真データを用いた
コミュニティ活性化支援に関する共同研究

～川崎タイムマシン～
「環境」×「川崎の過去・現在」を対話する

国際大学　グローバル・コミュニケーション・センター（GLOCOM）
准教授・主任研究員
庄司昌彦　shoji@glocom.ac.jp

研究分野と研究概要

【研究分野】

安心・安全で質の高い社会の構築

【研究概要】

1. 川崎市の過去と現在の身近な環境を比較する公共データの発掘・生成
   - 身近な環境の、過去から現在までの推移や、人々の努力・取組み、街の姿の変貌などを示す素材を発掘・生成し、公共的な資源とする。
2. 地域社会における「環境コミュニケーション」活性化の効果的な方法やプロセスの確立
   - １．の素材が、地域の多世代・多職種の人々が環境活動等に向けて協力していくためのコミュニケーションや関係構築に貢献していくための手法を開発する。
3. 成果を、川崎の魅力を伝える素材として、国内外に向け発信する

地域の環境に対する市民の関心を喚起し、具体的な行動につなげるための協力関係構築にさまざまなデータを発掘・生成し活用することを研究テーマとしています。コミュニケーションそのものを目的としたものではありません。

昨年度の活動成果と課題

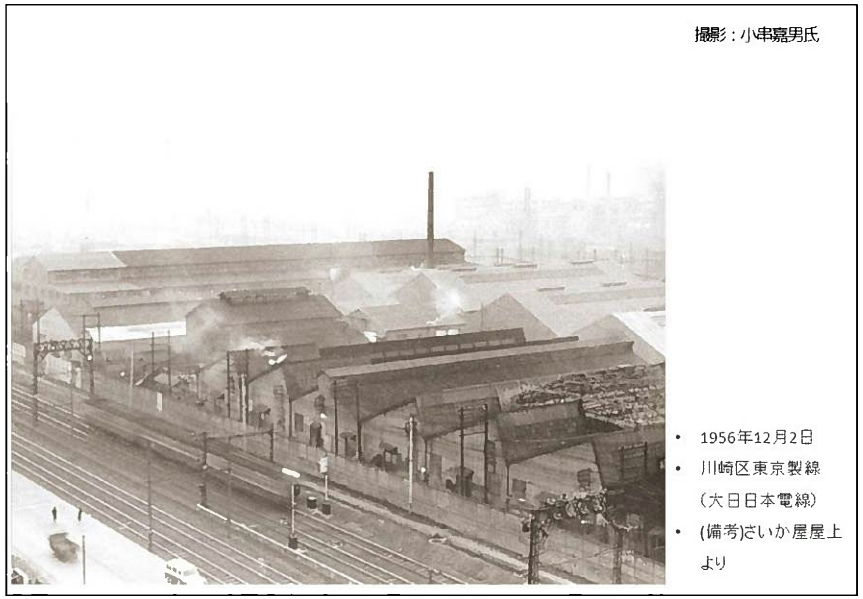
【成果】

1. <u>社会的資源の再発見</u>
   - **写真**：川崎市の過去の風景写真
   - **映像**：市政ニュース・公害ドキュメントドラマ
   - **データ**：データカタログ（川崎市のオープンデータ＋各種社会的データ）
   - **人間**：地域の方々との協力関係の構築
2. <u>社会的資源の活用</u>
   - 庁内ミニワークショップ
   - 映像資料「ウォッチソン」
   - 「環境 × 川崎の過去・現在」を対話するワークショップ
   - 川崎国際環境技術展2015出展

【課題】

- 複数回実施したワークショップを通じて得た知見を基に規模を拡大し、多くの市民を巻き込み発展させていく
- 社会的資源が一定数集った時点で、市内外に発信していく

社会的資源の再発見（2014年度）



- 中原図書館所蔵の小串嘉男氏、倉形泰造氏撮影の写真を借用。
- 各スライドに写真1枚とその撮影年月日、場所、備考を掲載。

- 過去の市政ニュース映像集と公害ドキュメントドラマ映像を編集。
- 「公害」「川崎市平地・山間部」「川崎市臨海部」の3テーマ・1本10分前後の映像を作成（それぞれ6-7本ずつのニュース映像を使用）

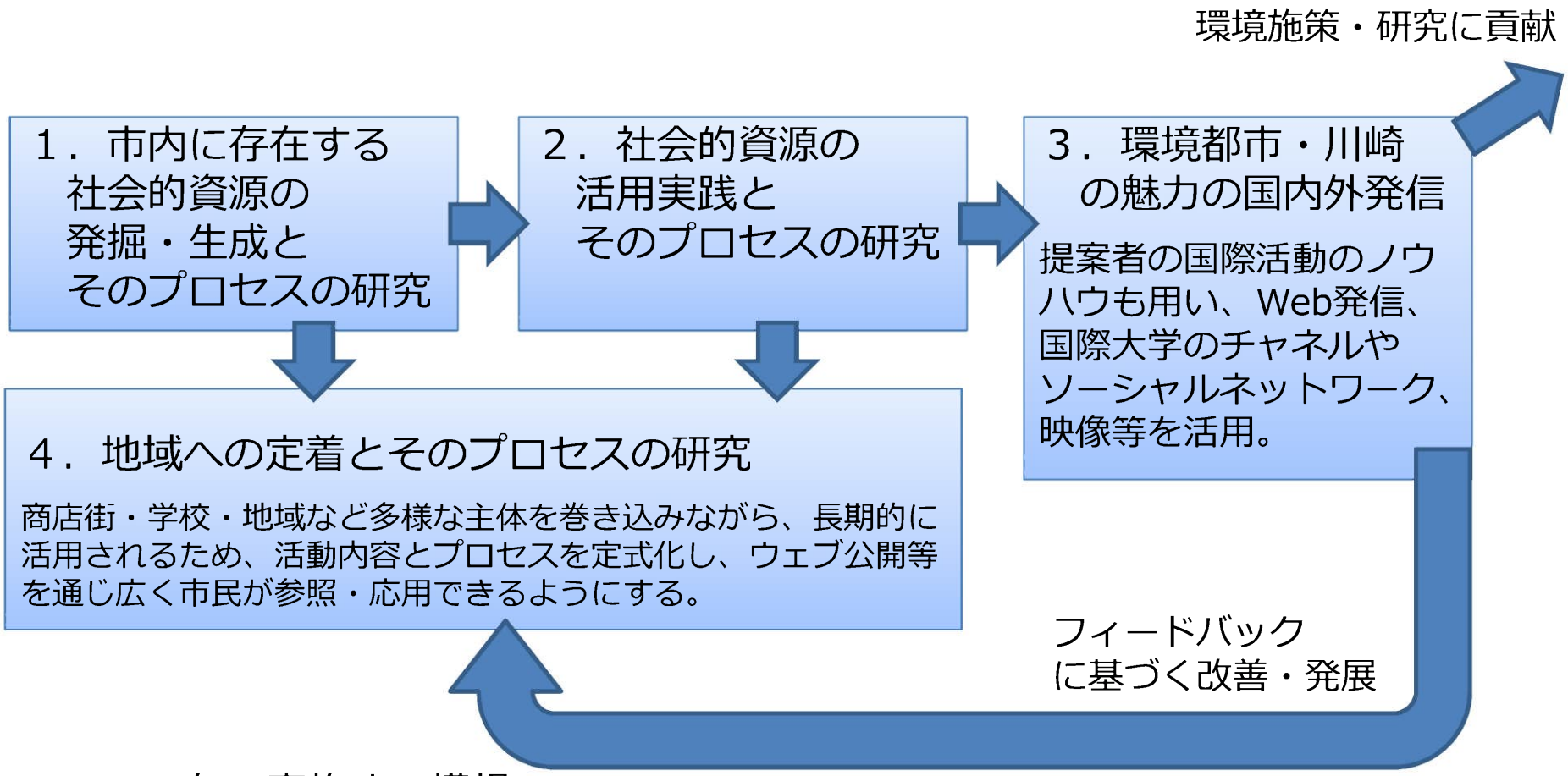
社会的資源の活用（2014年度）

- 映像資料「ウォッチソン」
  - 市政ニュース映像4時間分を視聴。過去の映像が環境問題と歴史への理解を深め対話を媒介することを確認

- 「環境 × 川崎の過去・現在」を対話するワークショップ
  - 川崎の環境に関する体験を語り、街の姿の変容等を表す写真や映像の地域資源としての価値を再発見。世代等を超えた関係創出も目指す

- 川崎国際環境技術展2015出展
  - 来場者と対話し感想やコメントをポスト・イットで即時に掲示

研究項目とその関係



- 3ヶ年で実施する構想。
- 2年目の本年は、引き続き1・2に注力し市内複数地域へ展開する。
- 同時に、３・４も部分実施し最終年度を意識した活動を行う。

今年度の活動概要

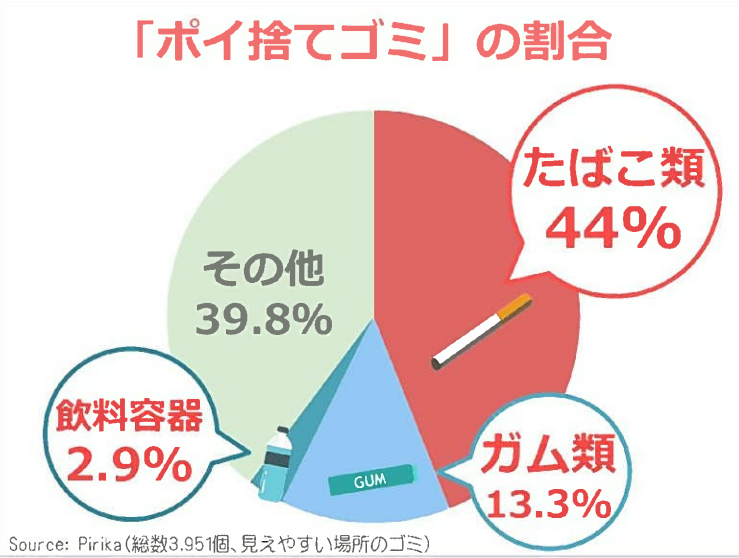
【研究項目１】

- 川崎市の過去と現在の身近な環境を比較する公共データの発掘・生成とそのプロセスの研究（**市民科学的アプローチ**）
- 昨年度は川崎市の**「過去」**に関する社会的資源を収集（映像・写真）。今年度も川崎市等が保有する関連既存データの収集は引き続き行う。
- 今年度は**「現在」**の身近な環境である路上ゴミに注目。（株）ピリカのソーシャルゴミ拾いプラットフォームとポイ捨てゴミ調査サービスを活用した公共データ作成ワークショップを実施（9・10月）。
- データはオープンデータ化する。データから得られた知見や参加者の発見も広く公開する。市の関連部署等への発表、提言も行いたい。

今年度の活動概要

【研究項目１】

- ポイ捨てゴミに注目する理由：
  －路上ゴミは、市民にとって最も身近な課題でありながら、道路や環境、まちづくり等の行政部門にまたがり、実態把握されにくかった。
  （※さらに、例えば道路は市や県、国等に管理者が分化している）
- ゴミ拾い行為自体はよく行われ脚光が当たるが、拾われたゴミの定量的な把握や分析はあまり意識されてこなかった。
- 市民が参加し自らデータを作成・考察するのにふさわしいテーマ



東京23区できれいな区は？
by「ピリカ」ポイ捨てゴミ数量ランキング

1位：千代田区	12位：墨田区
2位：中野区	14位：台東区
2位：文京区	14位：板橋区
4位：港区	14位：品川区
4位：中央区	17位：杉並区
6位：荒川区	18位：江東区
7位：新宿区	19位：足立区
7位：世田谷区	19位：目黒区
9位：北区	21位：大田区
10位：豊島区	22位：渋谷区
11位：練馬区	23位：江戸川区
12位：葛飾区	

Reserched by

図表：アプリマーケティング研究所
データはピリカによる東京23区の調査結果
http://appmarketinglabo.net/pirika/

今年度の活動概要

【研究項目２】

- １で発掘・生成した社会的資源（データ）を素材とし、地域の多世代・多職種の人々が環境活動等に向け協力していくためのコミュニケーションや関係構築のための手法・プロセスを開発する。

  - 昨年度は、川崎市南・中・北部の各地域で連携先の選定と関係構築を実施。今年度は、各連携先と協働し各地域でワークショップを開催する。

  - 世代間、コミュニティ（社会的グループ）間の連携を重視する。
    地域との繋がりが薄くなりがちな大学生等も取り込んでいきたい。

  - 環境についての対話空間を設置し人々のコミュニケーションを観察する。
    （社会的資源の使われ方やプロセスに地域ごとの違いはあるのか等）

  - 市のオープンデータ担当の部署や市民グループ（オープン川崎等）と連携強化する。川崎市はオープンデータ活用施策に力を入れており、提案者は2013年度より協力してきた。ここに「環境」を組合わせ、さらなるデータ有効活用に向けた啓発、参加促進を進める。

川崎市の環境施策への貢献

【課題】地域力の低下が身近な環境問題の悪化につながる可能性

- 環境保全など地域社会の課題を解くための鍵は、人々の自発的な協調行動を生み出す地域コミュニティのあり方である。
- しかし、少子高齢化、単身世帯化、生活様式の多様化等が進む中、人々の協力関係を構築し地域コミュニティを活性化することは困難。
- そのため本来は住民の協働で解決可能な地域の環境課題が行政に持ち込まれ、行政・社会的コストが増大していくことが懸念される

【本研究の価値】

1. **公共資源の発掘・生成：**市民に身近な環境の変遷を示す素材（データ等）を発掘・生成し、公共的な資源の活用促進に貢献する。
2. **社会関係資本の醸成：**市民が身近な地域の環境の変遷を理解し、環境保全等の課題に世代や立場を越えて取り組んでいくための新たな協調関係を結ぶ
3. **川崎モデルの国内外への発信：**川崎市の環境が公害等のマイナス状況からプラスに転じた経緯を市民が理解しながら未来に向けて協力関係を結ぶ手法を**「川崎モデル」**として国内外に紹介する

研究チームとその強み

国際大学GLOCOM 社会イノベーションラボ　＋　富士通研究所 Ｒ＆Ｄ戦略本部

- 地域社会研究、地域情報化・ソーシャルメディア研究による専門性
  - 地域SNS研究会（06年－現在）を主宰、各地の現地訪問調査を実施
  - 『地域SNS最前線』（2007年）、総務省情報通信白書（2010年）等の成果
  - 総務省地域情報化アドバイザー
- 多種対連携による実践的プロジェクトを多数運営してきた実績
  - 写真を使ったコミュニケーション活性化「ヒストリーピン・富士宮プロジェクト」
  - 社会課題中心アプローチ×国際的企業連携活動「Futures」ほか
- オープンデータに関する国内外の自治体・組織との関係
  - 公共データの活用に向けた政策形成・提言、普及啓発活動
  - 川崎市「平成25年度政策課題研究：行政情報のオープンデータ化～川崎市における取組のあり方を考える～」を支援
  - オープンデータを用いた都市評価ツール（富士通）
  - 国土交通省 平成26年度 地理空間情報に関するアプリケーション・サービス普及促進業務「G空間未来デザインプロジェクト」　※慶應義塾大学との協働、川崎市宮前区にて実施。

➢株式会社ピリカ：ソーシャルゴミ拾いプラットフォームを運営し、ポイ捨てゴミを定量的な把握に務める企業。ポイ捨てゴミの工学的な調査におけるトップランナー。
➢川崎市ー富士通包括協定（2014年2月）：協力分野に「環境にやさしいまちづくり」やオープンデータ活用等。